

生産要素量の変化と財生産量の変化の関係について

On the Relationship between Change in the Quantities
of Factors of Production and Produced Goods

河 村 朗 *

Akira KAWAMURA

抄 錄

この研究ノートでは、2財2要素モデルにおいて、生産要素の数量変化によって財の生産量がどのように変わるかを説明する。いくつかのケースがモデルによって分析され、またその際、リプチンスキーオの定理も証明される。

1. はじめに

本研究ノートの目的は生産要素の数量変化によって財の生産量がどのように変化するかを2財2要素モデルにおいて数学的に明らかにすることである。以下では、Jonesタイプの定式化を基本に、それらの間の関係を数学的に説明する¹⁾。

2. モデル

まず、以下のように仮定をする。財は財1と財2の2つある。これらの2つの財が2つの生産要素、労働と資本によって規模に関して収穫不变の技術の下で生産され、それらの2財、2要素市場では完全競争が行われている。また、2要素市場では要素が完全雇用されている。

さて、財1、財2の完全雇用条件は、

$$a_{L1}Q_1 + a_{L2}Q_2 = L \quad (1)$$

$$a_{K1}Q_1 + a_{K2}Q_2 = K \quad (2)$$

によって示され、次に、財1、財2の完全競争条件は、

* 関西国際大学経営学部

$$a_{L1}w + a_{K1}r = P_1 \quad (3)$$

$$a_{L2}w + a_{K2}r = P_2 \quad (4)$$

として示される。ここで、 a_{L1} , a_{L2} , a_{K1} , a_{K2} はそれぞれ財1・財2の労働係数、財1・財2の資本係数である。 Q_1 , Q_2 は財1, 財2の生産量を示し、L, Kは労働, 資本を示す。 w は賃金率, r はレンタルを示し, P_1 , P_2 はそれぞれ財1, 財2の価格である。

また, a_{L1} , a_{L2} , a_{K1} , a_{K2} は賃金・レンタル比率の関数である。それゆえ,

$$a_{L1} = a_{L1}(w/r) \quad (5)$$

$$a_{L2} = a_{L2}(w/r) \quad (6)$$

$$a_{K1} = a_{K1}(w/r) \quad (7)$$

$$a_{K2} = a_{K2}(w/r) \quad (8)$$

である。式は,(1)~(8)の8つであり, 変数は a_{L1} , a_{L2} , a_{K1} , a_{K2} , Q_1 , Q_2 , w , r の8つであるので, パラメーターである P_1 , P_2 , L, Kが所与であれば, 8つの変数の解を求めることができる。

いま,(1),(2)式を全微分すると,

$$a_{L1}dQ_1 + Q_1da_{L1} + a_{L2}dQ_2 + Q_2da_{L2} = dL \quad (9)$$

$$a_{K1}dQ_1 + Q_1da_{K1} + a_{K2}dQ_2 + Q_2da_{K2} = dK \quad (10)$$

となる。

この(9),(10)式の両辺をそれぞれL, Kで割れば,

$$a_{L1}dQ_1/L + Q_1da_{L1}/L + a_{L2}dQ_2/L + Q_2da_{L2}/L = dL/L \quad (11)$$

$$a_{K1}dQ_1/K + Q_1da_{K1}/K + a_{K2}dQ_2/K + Q_2da_{K2}/K = dK/K \quad (12)$$

となるが,(11),(12)式はさらに次のように変形できる。

$$(a_{L1}Q_1/L)(dQ_1/Q_1) + (Q_1a_{L1}/L)(da_{L1}/a_{L1}) + (a_{L2}Q_2/L)(dQ_2/Q_2) + (Q_2a_{L2}/L)(da_{L2}/a_{L2}) = dL/L \quad (13)$$

$$(a_{K1}Q_1/K)(dQ_1/Q_1) + (Q_1a_{K1}/K)(da_{K1}/a_{K1}) + (a_{K2}Q_2/K)(dQ_2/Q_2) + (Q_2a_{K2}/K)(da_{K2}/a_{K2}) = dK/K \quad (14)$$

それゆえ, $dQ_1/Q_1 = \hat{Q}_1$, $dQ_2/Q_2 = \hat{Q}_2$, $da_{L1}/a_{L1} = \hat{a}_{L1}$, $da_{L2}/a_{L2} = \hat{a}_{L2}$, $dL/L = \hat{L}$, $da_{K1}/a_{K1} = \hat{a}_{K1}$, $da_{K2}/a_{K2} = \hat{a}_{K2}$ とし, また $a_{L1}Q_1/L = L_1/L = \lambda_{L1}$, $a_{L2}Q_2/L = L_2/L = \lambda_{L2}$, $a_{K1}Q_1/K = K_1/K = \lambda_{K1}$, $a_{K2}Q_2/K = K_2/K = \lambda_{K2}$, $dK/K = \hat{K}$ とすれば,(13),(14)式は

$$\lambda_{L_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{L_2}\hat{Q}_2 = \hat{L} - (\lambda_{L_1}\hat{a}_{L_1} + \lambda_{L_2}\hat{a}_{L_2}) \quad (15)$$

$$\lambda_{K_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{K_2}\hat{Q}_2 = \hat{K} - (\lambda_{K_1}\hat{a}_{K_1} + \lambda_{K_2}\hat{a}_{K_2}) \quad (16)$$

となる。ここで、 L_1, L_2, K_1, K_2 はそれぞれ財1の生産において雇用される労働投入量、財2の生産において雇用される労働投入量、財1の生産において雇用される資本投入量、財2の生産において雇用される資本投入量を示している。

次に、(3), (4)式を全微分すれば、

$$a_{L_1}dw + wda_{L_1} + a_{K_1}dr + rda_{K_1} = dP_1 \quad (17)$$

$$a_{L_2}dw + wda_{L_2} + a_{K_2}dr + rda_{K_2} = dP_2 \quad (18)$$

となるので、(17)式を P_1 で、(18)式を P_2 で割ると、

$$a_{L_1}dw/P_1 + wda_{L_1}/P_1 + a_{K_1}dr/P_1 + rda_{K_1}/P_1 = dP_1/P_1 \quad (19)$$

$$a_{L_2}dw/P_2 + wda_{L_2}/P_2 + a_{K_2}dr/P_2 + rda_{K_2}/P_2 = dP_2/P_2 \quad (20)$$

となる。さらに(19),(20)式は

$$(a_{L_1}w/P_1)(dw/w) + (wa_{L_1}/P_1)(da_{L_1}/a_{L_1}) + (a_{K_1}r/P_1)(dr/r) + (ra_{K_1}/P_1)(da_{K_1}/a_{K_1}) = dP_1/P_1 \quad (21)$$

$$(a_{L_2}w/P_2)(dw/w) + (wa_{L_2}/P_2)(da_{L_2}/a_{L_2}) + (a_{K_2}r/P_2)(dr/r) + (ra_{K_2}/P_2)(da_{K_2}/a_{K_2}) = dP_2/P_2 \quad (22)$$

と変形できるので、 $a_{L_1}w/P_1 = \theta_{L_1}$, $a_{K_1}r/P_1 = \theta_{K_1}$, $a_{L_2}w/P_2 = \theta_{L_2}$, $a_{K_2}r/P_2 = \theta_{K_2}$ と置き換える、
 $dw/w = \hat{w}$, $dr/r = \hat{r}$, $dP_1/P_1 = \hat{P}_1$, $dP_2/P_2 = \hat{P}_2$ とすれば、(21), (22)式は、

$$\theta_{L_1}\hat{w} + \theta_{K_1}\hat{r} = \hat{P}_1 - (\theta_{L_1}\hat{a}_{L_1} + \theta_{K_1}\hat{a}_{K_1}) \quad (23)$$

$$\theta_{L_2}\hat{w} + \theta_{K_2}\hat{r} = \hat{P}_2 - (\theta_{L_2}\hat{a}_{L_2} + \theta_{K_2}\hat{a}_{K_2}) \quad (24)$$

となる。

次に、財1, 財2の費用最小化を実現するために、それらのコスト C を全微分する。財1, 財2のコスト C_1, C_2 をそれぞれ、 $wa_{L_1} + ra_{K_1}$, $wa_{L_2} + ra_{K_2}$ とすれば、

$$wda_{L_1} + a_{L_1}dw + rda_{K_1} + a_{K_1}dr = dC_1 \quad (25)$$

$$wda_{L_2} + a_{L_2}dw + rda_{K_2} + a_{K_2}dr = dC_2 \quad (26)$$

となる。これらの(25), (26)式において C_1, C_2, w, r を一定とすると、(5)～(8)式より $a_{L1}, a_{L2}, a_{K1}, a_{K2}$ も一定であるので、(25), (26)式を P_1, P_2 で割れば、

$$wda_{L1}/P_1 + rda_{K1}/P_1 = 0 \quad (27)$$

$$wda_{L2}/P_2 + rda_{K2}/P_2 = 0 \quad (28)$$

を得る。(27), (28)式をさらに

$$(wa_{L1}/P_1)(da_{L1}/a_{L1}) + (ra_{K1}/P_1)(da_{K1}/a_{K1}) = 0 \quad (29)$$

$$(wa_{L2}/P_2)(da_{L2}/a_{L2}) + (ra_{K2}/P_2)(da_{K2}/a_{K2}) = 0 \quad (30)$$

と変形すれば、(29), (30)式は

$$\theta_{L1}\hat{a}_{L1} + \theta_{K1}\hat{a}_{K1} = 0 \quad (31)$$

$$\theta_{L2}\hat{a}_{L2} + \theta_{K2}\hat{a}_{K2} = 0 \quad (32)$$

と変形することができる。それゆえ、(31)式を(23)式に、(32)式を(24)式に代入すれば、

$$\theta_{L1}\hat{W} + \theta_{K1}\hat{r} = \hat{P}_1 \quad (33)$$

$$\theta_{L2}\hat{W} + \theta_{K2}\hat{r} = \hat{P}_2 \quad (34)$$

となる。

次に、財1、財2それぞれの要素代替弾力性を σ_1, σ_2 とすると、

$$\sigma_1 = (\hat{a}_{K1} - \hat{a}_{L1}) / (\hat{W} - \hat{r}) \quad (35)$$

$$\sigma_2 = (\hat{a}_{K2} - \hat{a}_{L2}) / (\hat{W} - \hat{r}) \quad (36)$$

となる。(31)式と(35)式より、

$$\hat{a}_{L1} = -\theta_{K1}\sigma_1(\hat{W} - \hat{r}) \quad (37)$$

(37)式を(31)式に代入すれば、

$$\hat{a}_{K1} = \theta_{L1}\sigma_1(\hat{W} - \hat{r}) \quad (38)$$

を得る。同様にして、(32), (36)式より $\hat{a}_{L2}, \hat{a}_{K2}$ を求めると、

$$\hat{a}_{L_2} = -\theta_{K_2}\sigma_2(\hat{w} - \hat{r}) \quad (39)$$

$$\hat{a}_{K_2} = \theta_{L_2}\sigma_2(\hat{w} - \hat{r}) \quad (40)$$

となる。(37), (39)式を(15)式に、そして(38), (40)式を(16)式に代入すると、

$$\lambda_{L_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{L_2}\hat{Q}_2 = \hat{L} + \alpha_L(\hat{w} - \hat{r}) \quad (41)$$

$$\lambda_{K_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{K_2}\hat{Q}_2 = \hat{K} - \alpha_K(\hat{w} - \hat{r}) \quad (42)$$

を得る。ここで、 $\alpha_L = \lambda_{L_1}\theta_{K_1}\sigma_1 + \lambda_{L_2}\theta_{K_2}\sigma_2$, $\alpha_K = \lambda_{K_1}\theta_{L_1}\sigma_1 + \lambda_{K_2}\theta_{L_2}\sigma_2$ である。

3. 生産要素の数量変化と財生産量の変化

ここで、財の相対価格を一定とした場合の生産要素投入量の変化が財生産量に与える効果を考える。財の相対価格は変化しないので、(33), (34)式より、 $\hat{w} = \hat{r} = 0$ である。それゆえ、(41), (42)式は次のようになる。すなわち、

$$\lambda_{L_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{L_2}\hat{Q}_2 = \hat{L} \quad (43)$$

$$\lambda_{K_1}\hat{Q}_1 + \lambda_{K_2}\hat{Q}_2 = \hat{K} \quad (44)$$

となるので、(43), (44)式より、 \hat{Q}_1 , \hat{Q}_2 を求める

$$\hat{Q}_1 = (\lambda_{K_2}\hat{L} - \lambda_{L_2}\hat{K}) / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) \quad (45)$$

$$\hat{Q}_2 = (\lambda_{L_1}\hat{K} - \lambda_{K_1}\hat{L}) / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) \quad (46)$$

である。

これらの(45), (46)式を用いて、 $\hat{Q}_1 - \hat{L}$, $\hat{Q}_2 - \hat{L}$, $\hat{Q}_1 - \hat{K}$, $\hat{Q}_2 - \hat{K}$ を求める

$$\begin{aligned} \hat{Q}_1 - \hat{L} &= (\lambda_{K_2}\hat{L} - \lambda_{L_2}\hat{K}) / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) - \hat{L} \\ &= \{\lambda_{L_2}(\hat{L} - \hat{K})\} / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) \end{aligned} \quad (47)$$

$$\begin{aligned} \hat{Q}_2 - \hat{L} &= (\lambda_{L_1}\hat{K} - \lambda_{K_1}\hat{L}) / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) - \hat{L} \\ &= \{\lambda_{L_1}(\hat{K} - \hat{L})\} / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) \end{aligned} \quad (48)$$

$$\begin{aligned} \hat{Q}_1 - \hat{K} &= (\lambda_{K_2}\hat{L} - \lambda_{L_2}\hat{K}) / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) - \hat{K} \\ &= \{\lambda_{K_2}(\hat{L} - \hat{K})\} / (\lambda_{L_1}\lambda_{K_2} - \lambda_{L_2}\lambda_{K_1}) \end{aligned} \quad (49)$$

$$\begin{aligned}\hat{Q}_2 - \hat{K} &= (\lambda_{L1}\hat{K} - \lambda_{K1}\hat{L}) / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1}) - \hat{K} \\ &= \{\lambda_{K1}(\hat{K} - \hat{L})\} / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1})\end{aligned}\quad (50)$$

となる。そこで、(47)～(50)式を用いて、以下で次の5つのケースについて調べる。つまり、(a) $\hat{K} > \hat{L} > 0$ 、(b) $\hat{L} > \hat{K} > 0$ 、(c) $\hat{K} = \hat{L} > 0$ 、(d) $\hat{K} > 0, \hat{L} = 0$ 、(e) $\hat{L} > 0, \hat{K} = 0$ である。その前に、 $\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1}$ の符号を調べておく。 $\lambda_{L1} + \lambda_{L2} = 1, \lambda_{K1} + \lambda_{K2} = 1$ であるので、

$$\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1} = \lambda_{L1} - \lambda_{K1} = \lambda_{K2} - \lambda_{L2}$$

である。それゆえ、もし財1が労働集約財（財2が資本集約財）であれば、

$$(\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1}) > 0$$

であり、もし財1が資本集約財（財2が労働集約財）であれば、

$$(\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1}) < 0$$

である。以下では、財1が資本集約財、財2が労働集約財であると仮定する。

(a) $\hat{K} > \hat{L} > 0$

(47)式より $\hat{Q}_1 - \hat{L} > 0$ 、(48)式より $\hat{Q}_2 - \hat{L} < 0$ 、(49)式より $\hat{Q}_1 - \hat{K} > 0$ 、(50)式より $\hat{Q}_2 - \hat{K} < 0$ であるので、 $\hat{Q}_1 > \hat{K} > \hat{L} > \hat{Q}_2$ となる。

(b) $\hat{L} > \hat{K} > 0$

(47)式より $\hat{Q}_1 - \hat{L} < 0$ 、(48)式より $\hat{Q}_2 - \hat{L} > 0$ 、(49)式より $\hat{Q}_1 - \hat{K} < 0$ 、(50)式より $\hat{Q}_2 - \hat{K} > 0$ であるので、 $\hat{Q}_2 > \hat{L} > \hat{K} > \hat{Q}_1$ となる。

(c) $\hat{K} = \hat{L} > 0$

(47)式より $\hat{Q}_1 - \hat{L} = 0$ 、(48)式より $\hat{Q}_2 - \hat{L} = 0$ 、(49)式より $\hat{Q}_1 - \hat{K} = 0$ 、(50)式より $\hat{Q}_2 - \hat{K} = 0$ であるので、 $\hat{Q}_1 = \hat{Q}_2 = \hat{L} = \hat{K}$ となる。

(d) $\hat{K} > 0, \hat{L} = 0$

(47)式より $\hat{Q}_1 - \hat{L} > 0$ 、(48)式より $\hat{Q}_2 - \hat{L} < 0$ 、(49)式より $\hat{Q}_1 - \hat{K} > 0$ 、(50)式より $\hat{Q}_2 - \hat{K} < 0$ であるので、 $\hat{Q}_1 > \hat{K} > \hat{L} = 0 > \hat{Q}_2$ となる。

(e) $\hat{L} > 0, \hat{K} = 0$

(47)式より $\hat{Q}_1 - \hat{L} < 0$ 、(48)式より $\hat{Q}_2 - \hat{L} > 0$ 、(49)式より $\hat{Q}_1 - \hat{K} < 0$ 、(50)式より $\hat{Q}_2 - \hat{K} > 0$ であるので、 $\hat{Q}_2 > \hat{L} > \hat{K} = 0 > \hat{Q}_1$ となる。

4. 結論

生産要素の数量変化、特にそれが増大する時に財の生産量に与える効果について、これまで説明してきたことをまとめます。

第一に、(a)のケースから分かるように、資本の増加率の方が労働の増加率よりも大きい場合には、資本が集約的に生産において用いられる財1の生産量が一番大きく増大し、労働が集約的に用いられる財2の生産量の増加率は相対的に小さくなる。ただし、Jones (1965) の拡大効果により、増加率を相対的に考えると、財1の増加率は資本の増加率よりも大きく、財2の増加率は労働のそれよりも小さいことが分かる。また、このことは、(b)のケースから明らかのように、もし労働の増加率が資本のそれよりも大きいならば、この結論とは全く正反対のことが起きることが分かる。

第二に、ケース(c)から分かるように、資本と労働が同じ変化率で増大する場合には、財1および財2の増加率はまったく同じである。この場合には、拡大効果は存在しない。

第三に、(d)のケースが示すように、資本のみが増大し、労働の数量が変化しない場合には、資本を集約的に用いる財1の生産量が資本の増加率以上に増大し、労働を集約的に用いる財2の生産量は絶対的に減少する。このことは、(e)のケースのように、労働のみが増大し、資本の数量は変化しないときには、逆のことが起こり、財2の生産量が労働の増加率以上に増大し、財1の生産量は絶対的に減少する。これらの結論は、リプチンスキーの定理と呼ばれている²³⁾。

最後に、何点かの注意点について述べておきたい。

第一に、以上で得た結論は、財1(財2)が資本集約財(労働集約財)であることを前提としたものであるので、もし財1(財2)が労働集約財(資本集約財)であれば、反対の結論になることは言うまでもない。また、本ノートの第3節の5つのケースにおいて、資本や労働が増加するケースを取り上げたが、それらが減少する場合にも対称的に考えることが可能である。

第二に、第3節で取り上げた(a)～(e)のケースで述べた結論は、2つの財の間の相対価格が一定であることを想定して出されたものであるので、もし相対価格が変化すれば、第2節の(33),(34)式を通じて w , r に影響を及ぼすことになる。この場合には、本ノートで明らかにした結論は当てはまらなくなるかもしれない。

[注]

- 1) 本ノートの数学的表現の多くは、小田正雄『国際経済学の基礎』マグロウヒルブック、1980、24－31頁、小田正雄『現代国際経済学』有斐閣、1997、20－32頁を参考にした。
- 2) ケース(d),(e)のように、資本(労働)のみが増大する場合に、資本集約財である財1(労働集約財である財2)の生産量が増大し、財2(財1)のそれが減少することは、第3節の(45),(46)式を用いて明らかにすることが出来る。最初に、ケース(d)のように、 $\hat{K} > 0$, $\hat{L} = 0$ のときには(45),(46)式より、

$$\hat{Q}_1 = -(\lambda_{L2}\hat{K}) / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1})$$

$$\hat{Q}_2 = (\lambda_{L1}\hat{K}) / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1})$$

となるので、 $\hat{Q}_1 > 0$, $\hat{Q}_2 < 0$ となる。次に、ケース(e)のように、 $\hat{L} > 0$, $\hat{K} = 0$ のときには(45),(46)

式より、

$$\hat{Q}_1 = (\lambda_{K2}\hat{L}) / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1})$$

$$\hat{Q}_2 = -(\lambda_{K1}\hat{L}) / (\lambda_{L1}\lambda_{K2} - \lambda_{L2}\lambda_{K1})$$

となるので、 $\hat{Q}_1 < 0$, $\hat{Q}_2 > 0$ となる。

- 3) リプチンスキーの定理を図示した場合に得られる直線がリプチンスキー線である。ここでは、この線の傾きについて、Martin(1976)に依拠しながら補足しておきたい。

(a) 労働の数量のみが変化するケース

第2節の(9), (10)の各式において、財相対価格が一定で、資本の数量が変化しないとすれば、 $da_{L1} = 0$, $da_{L2} = 0$, $da_{K1} = 0$, $da_{K2} = 0$, $dK = 0$ である。それゆえ、(9), (10)式は、

$$a_{L1}dQ_1 + a_{L2}dQ_2 = dL$$

$$a_{K1}dQ_1 + a_{K2}dQ_2 = 0$$

となる。これらの式より、 dQ_2/dL を求めると、

$$dQ_2/dL = -a_{K1}/(a_{K2}a_{L1} - a_{K1}a_{L2})$$

となる。

同様に、 dQ_1/dL を求めると、

$$dQ_1/dL = a_{K2}/(a_{K2}a_{L1} - a_{K1}a_{L2})$$

となる。以上の説明より、

$$(dQ_2/dQ_1)|_{dK=0} = -a_{K1}/a_{K2}$$

となる。

(b) 資本の数量のみが変化するケース

(9), (10)の各式において、財相対価格が一定で、労働の数量が変化しないとすれば、 $da_{L1} = 0$, $da_{K1} = 0$, $da_{L2} = 0$, $da_{K2} = 0$, $dL = 0$ である。それゆえ、(9), (10)式は、

$$a_{L1}dQ_1 + a_{L2}dQ_2 = 0$$

$$a_{K1}dQ_1 + a_{K2}dQ_2 = dK$$

となる。ここで、これらの式より、 dQ_2/dK を求めると、

$$dQ_2/dK = a_{L1}/(a_{K2}a_{L1} - a_{K1}a_{L2})$$

となる。

同様に、 dQ_1/dK を求めると、

$$dQ_1/dK = -a_{L2}/(a_{K2}a_{L1} - a_{K1}a_{L2})$$

となる。それゆえ、

$$(dQ_2/dQ_1)|_{dL=0} = -a_{L1}/a_{L2}$$

となる。

さてここで、 $(dQ_2/dQ_1)|_{dK=0}$ と $(dQ_2/dQ_1)|_{dL=0}$ の大小関係を考える。その際、財の相対価格が変化しなければ、要素投入係数の相対比率である a_{K1}/a_{K2} , a_{L1}/a_{L2} は一定であること、つまり傾きは定数であることに注意すべきである。

生産要素量の変化と財生産量の関係について

$$(dQ_2/dQ_1)|_{dK=0} - (dQ_2/dQ_1)|_{dL=0} = (-a_{K1}/a_{K2}) - (-a_{L1}/a_{L2}) = (a_{L1}a_{K2} - a_{L2}a_{K1}) / a_{L2}a_{K2}$$

であるので、財1が資本集約財（財2が労働集約財）である限り、

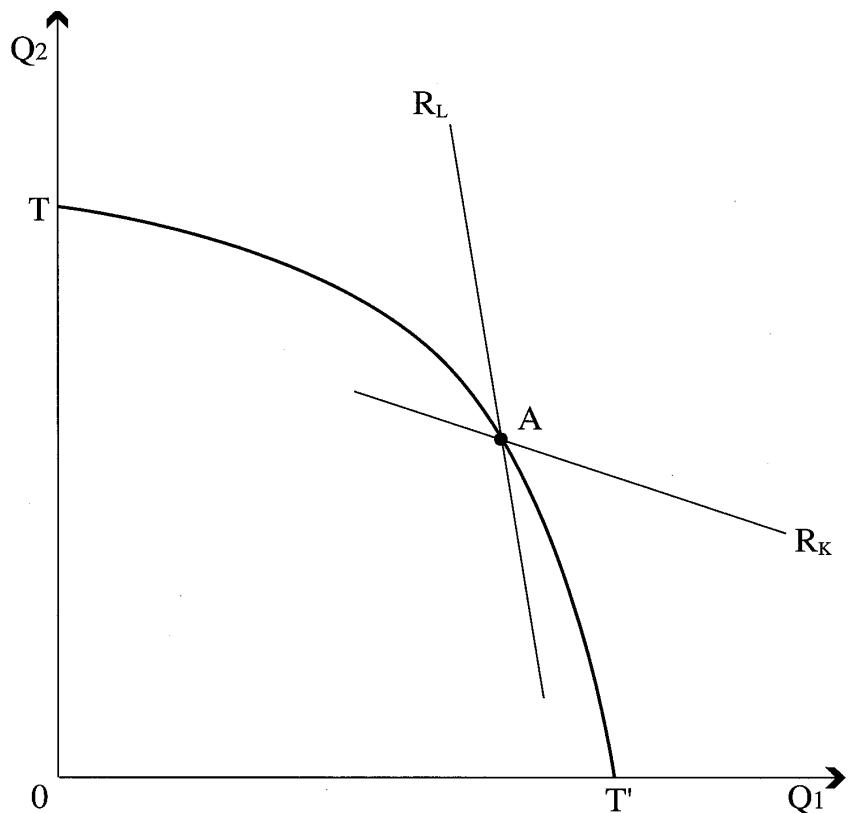
$$(a_{L1}a_{K2} - a_{L2}a_{K1}) / a_{L2}a_{K2} < 0$$

である。それゆえ、

$$(-a_{K1}/a_{K2}) < (-a_{L1}/a_{L2})$$

である。この結果、次のことが分かる。つまり、横軸に資本集約財である財1の生産量 Q_1 、縦軸に労働集約財である財2の生産量 Q_2 をはかった図1において、それら2つの財の生産可能性フロンティアを TT' とすれば、この TT' に最適な生産点であるA点で交差している2つのリプチンスキーライン R_K , R_L の傾きの数値は資本の数量のみが変化する場合に得られる R_K の方が、労働の数量のみが変化する場合の R_L よりも大きくなるのである。

図1 リプチンスキーライン



[参考文献]

- 1) Chiang, Alpha, C.,: *Fundamental Methods of Mathematical Economics*, second ed., McGraw-Hill, Inc., 1974 (大住栄治・小田正雄・高森寛・堀江義訳『現代経済学の数学基礎（上）』シーエーピー出版 1995)
- 2) Jones, Ronald, W.,: "The Structure of Simple General Equilibrium Models", *Journal of Political Economy* 73, 1965, pp. 557-572.
- 3) Martin, John, P.,: "Variable Factor Supplies and the Heckscher-Ohlin-Samuelson Model", *Economic Journal* 86, 1976, pp. 820-831.
- 4) Rybczynski, T.M.,: "Factor Endowment and Relative Commodity Prices", *Economica* 22, 1955, pp.336-341.
- 5) Wong, Kar-Yiu, : *International Trade in Goods and Factor Mobility*, MIT Press, 1995 (下村耕嗣・太田博史・大川昌幸・小田正雄訳『現代国際貿易論I 一財貿易と要素移動の統合理論』 多賀出版 1999)
- 6) 小田正雄:『国際経済学の基礎』 マグロウヒルブック 1980
- 7) 小田正雄:『現代国際経済学』 有斐閣 1997
- 8) 西村和雄:『経済数学早わかり』 日本評論社 1982

Abstract

This note explains how quantities of produced goods will change by change in the quantities of factors of production mathematically by using two goods - two factors model. Some cases are analyzed by the model, and Rybczynski Theorem is also proved.